

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690400037		
法人名	社会福祉法人 終野福祉会		
事業所名	グループホーム四条大宮		
所在地	京都府京都市下京区大宮通綾小路下る綾大宮町52番地		
自己評価作成日	令和4年7月4日	評価結果市町村受理日	令和4年9月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaisokkensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&ijyosyoCd=2690400037-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
京都	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1「ひとまち交流館京都」1階
訪問調査日	令和4年7月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

暮らしやすい環境について常に考え、利用者一人一人の望む暮らしを大切に、それぞれの方に合った個別支援を実施するように努めています。四条大宮駅から徒歩、周辺には商店や食事処が点在しており、気軽に買い物や外食に出掛ける環境が整っているため、ホームの中のみで支援するのではなく、できる限り外に出掛け、他者と関わる機会を設けています。また、ご家族との関係を今までと同じように継続していけるよう納涼祭、開所記念行事、母の日(しゃぶしゃぶ)、忘年会(蟹すき)を毎年開催し、「おばあちゃんの家」と感じていただきたいと交流の機会を大切にしています。コロナ禍になってからこれらの支援ができずにいますが、室内で楽しんでいただけるようオンラインやお取り寄せなどを活用したり、園芸に力を入れるなど工夫しています。利用者様が落ち着いて過ごす為には、職員が馴染みの存在になることが重要であると考えます。職員の希望や教育について考え、継続して働きやすい職場を目指して

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

四条大宮の繁華街にある、有料老人ホームとグループホーム1ユニットの高齢者複合施設は、開設時から「法人理念」「事業所理念」の実現に向けて、利用者の思いや意向に添った支援を目指され、恵まれた立地条件を活かし、地域資源とも関わり繋がって暮らすことを大切にされてきました。昨年は開設当初からの入居者6人の方を看取り、尊厳を大切に一人ひとりの看取りをコロナ禍の中でしたが、家族や後見人に見守られ最期の時を迎えられました。また、家族が居ない入居者は、寂しくないようにと、後見人と一緒に遺影や棺の中に入れる物を選び、お葬式には職員始め、介護保険で世話になっていた方々も参列して一緒に見送られました。このように看取りについてたくさん学びや経験をされています。災害時の取り組みも、BCP計画や利用者、職員の安否確認ができる体制を整え、家族にも知らせています。今年度は入居者の入れ替わりで、近隣からの入居が増え、地域密着型の特性を活かされる環境になっており、入居者一人ひとりを主人公にした「笑顔」が絶えない支援に力を注がれています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) <input type="radio"/>	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) <input type="radio"/>
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) <input type="radio"/>	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) <input type="radio"/>
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) <input type="radio"/>	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) <input type="radio"/>
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) <input type="radio"/>	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12) <input type="radio"/>
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) <input type="radio"/>	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う <input type="radio"/>
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) <input type="radio"/>	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う <input type="radio"/>
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) <input type="radio"/>		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	“笑顔と信頼を大切にあなたらしい生活のお手伝い致します”という事業所理念のもと4月に本年度のチーム目標を作成。目標達成を目指し、個別の目標を設定。個別の目標の進捗を確認しながらチーム全員で理念を実現を目指している。		法人理念【「長生きして良かった」と心から喜んでいただける日が一日でも多くありますように】とパンフレットに掲載し、開設時の職員でつくった事業所理念を広報紙に掲載している。リビングの良く見える場所に両方の理念を貼りだしている。支援に迷ったときに「何のために、なんでそれをするのか」と絶えず理念に立ち返るようにしている。毎年度作成するチーム目標を利用者に書道で記してもらい、皆が落ち着いて見られる職員用トイレに掲示している。また、職員個別の目標も作成し、広報誌にチーム目標と職員の目標を公表し、職員全員で理念の実現を目指されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加盟し、地域行事に毎回参加しているがコロナ禍になってからはできていない。また、日常的には買い物や美容室の利用を通して交流していたがその機会も喪失しており早く再開したい。		事業所が大切にされていた地域の資源の活用や、利用者が地域との関わりの中で望む生活の実現を目指されていたが、コロナ禍で制限があり、一緒に買い物にも行けないので、職員が食材を買いに行き、オンラインで利用者に品物を選んでもらって購入している。また、インターンシップの学生をオンラインで受け入れ、利用者と学生のやり取りを二人の職員が中に入り言葉を繋げながら、実施されていたが、楽しい雰囲気、利用者の笑顔が多くみられた。(外部評価の日だったので様子を見せてもらった。)	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	下京4学区の地域ケア会議の参加、地域の会議に参加し、今後ホームを居場所としていただけるよう開放していく計画を立てていたがコロナ禍となり実施できていない。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事故や行事職員の紹介、研修等について報告。様子を伝える際にブログの写真等を添付し、地域の方からは、さまざまなアドバイスや地域の情報を教えていただき、サービスに繋げることができている。書面開催においてアンケートの回答をいただいている。	併設事業所と合同で開催している運営推進会議は、利用者代表、家族代表、郁文自治連合会会長、綾大宮町町会長、高齢サポート島原職員がメンバーで、利用者の状況やヒヤリハット・事故報告、職員紹介、研修、苦情の公表などを議題としている。2020年3月からは書面開催でレジュメとブログの写真と意見をもらうアンケート用紙を同封して送付している。議事録はもらったアンケート(意見)を記入してメンバーや家族全員に送付している。家族代表からは「行事や生活の様子は写真からよくわかるや、コロナ禍での対応への感謝の声」が聞かれ、地域からは「防災訓練の取り組みや行事での利用者の楽しそうな表情がよい」などの声が届いている。	丁寧に書かれたレジュメと利用者の様子が良く分かるブログの写真を載せた資料を送付され、議事録にはメンバーから寄せられた意見を記入されていたが、意見に対しての思いや事業所の姿勢を所感などで記されたら事業所の姿勢が良く分かり、より良い議事録になるでしょう。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	下京区役所へ運営推進会議での内容の報告を行っている。28年度下京区役所の方の会議出席もあったが現在はなく、課題である。今後下京地域包括運営協議会の構成員としてできることをしていきたい。	下京区役所担当課に運営推進会議開催前に資料を送付し、議事録を持って行っているが、渡す、受けとるだけの関係になっている。開催前の資料送付時のアンケートの意見も期待されている。下京区地域包括支援センター運営協議会の構成員として活動し、地域支え合い活動連絡協議会にも参加をして、オレンジキッチンの計画などをおこなっていたが、コロナ禍で出来ていない。行政や地域の人との連携活動が広がることを望まれている。また、京都地域密着型サービス事業所協議会居住系委員会に所属し2か月に1回の会議や事例検討などで、他事業所との連携にも積極的に関わっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束等適正化に関する指針をもとに委員会を実施。また研修を通して普段の支援で自分たちが知らないうちに身体拘束を行っているか等を振り返り、ケアの改善に努めている。	身体拘束適正化委員会を年4回・高齢者虐待防止委員会を年2回開催し、指針について討議している。身体拘束防止の研修は年2回集合研修としておこなっている。前回の研修は身体拘束に関するチェックシートで、「知らないうちに身体拘束をおこなっていないか」などの話題で、意識化できるようにしている。グループホームの玄関は施錠をせずにエレベーターの暗証番号を伝えているが、出ていく方は無く、1階に洗濯物を干したり、園芸で、1階迄降りているので、階段を一人で、降りられる危険のために、階段の扉に鈴をつけている。	

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止マニュアル、権利擁護マニュアルをもとに事業所内で研修を行い、職員間で意見交換を行っている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	事業所内で勉強会を実施し、ご家族からの相続や管理等のご相談の際には、制度についての説明や相談窓口等の紹介等を行えるよう準備している。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は十分に時間を確保していただき、出席していただける方全員に説明を行っている。利用料金等改定時は説明を行い、同意書をいただいている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	食事会等ご家族を招く行事を企画し、1日ゆっくりと利用者・家族・職員で話ができる機会を作っていたがコロナ禍でできていない。アンケートを実施した際は意見を反映した支援ができるよう体制を整えている。	家族からの意見は電話で聞くことが多いが、2年に1回実施する満足度アンケートでも意見を聞いている。アンケートは家族、利用者それぞれに集約し、グラフで分かりやすく表示し、家族に送付すると共に運営推進会議で公表している。家族からの意見は、利用者の服装のことや、食事の時にエプロン着用希望などで、利用者は食べたい物や行きたいところやレクリエーションの希望などである。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常のコミュニケーションや連絡ノートで意見を表せる機会を作り、必要に応じて職員会議で話し合い改善。管理者会議では法人内のグループホームの管理者、本部職員と組みについて情報交換や業務改善を図っている。	職員からの提案には、まず試してみて、その時の記録を残し、会議で話し合い反映できるようにしている。職員の意見はリビングの席の入れ替えや、食事を食べやすくすることなどで、色々な意見を連絡ノートに書き出している。また、職員会議の前にはパソコン上にレジユメを作成し、それぞれの意見を入力していき、会議の場で話し合っている。毎年、職員アンケートや年2回の面談をおこなうなど、職員の意見や提案を聞く機会を多く設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	目標管理シートを作成し、管理者が個人面接を行い目標達成に向けてのプランを話し合っている。また、パート職員には年2回アンケートを実施し面談を行っている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月事業所内研修を開催し、チームでのサービスの質の向上に努めている。法人本部の研修や外部研修へも個々の能力や興味に応じて参加できるよう調整を行っている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型居住系委員会に入会し、定例会議や研修に参加。2ヶ月に1回事例検討会で他事業所の事例検討をすることで現在事業所にはない事例を学んだり新たな発見や自分自身を見直す機会となっていたがコロナ禍は機会が減っている。			
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今までの生活について十分に情報収集を行い、日常で新たな情報を得た場合は記録し、ケース会議で周知。また、入居前と出来るだけ環境の変化を少なく、今まで通りの生活が出来るよう要望を大切にすることを心掛けている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族や関係者の方のご意見を伺い、ご家族との関係継続の為にできることがないか常に心掛けている。また共に支援する姿勢を伝え、入居後も関わりを持っていただくよう心がけている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の関係者からも情報収集を行い、家族、本人の希望を伺った上でグループホーム以外のサービスについても説明。また、必要に応じて訪問マッサージやアロマ等の利用を行っている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常の家事を一緒に行い、どうしたいか、どうすれば上手いかわか、その人のやりやすい方法について教わるという姿勢を大切にしよう心掛けている。また、自発的にして下さる事に対し見守りお礼を伝える事を大切にしている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	共に支援していく姿勢を大切に、相談、同意を得たうえで実施している。サービス内容にご家族を位置づけることで共に支える意識がもてると感じる。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	通っていた場所があれば行けるように企画し、顔見知りの人と会う機会、家族の行事等になるべく参加できる様に調整を行っている。	入居前に利用者・家族に「生活等に関する確認書」を記入して貰い、生活歴や馴染みの関係などの詳しい情報をもらっている。また、日常のコミュニケーションで聞いたことは、ケース記録や利用者ノートに記入して、職員間で共有している。コロナウイルス感染症流行までは、毎年6月に利用者それぞれの行きたいところに行ける支援をしてきたが、ここ3年は出来ていない。今は、入居までに住んでいた自宅に、衣類の入れ替えや馴染みの物を取りに行っている。また、お寺が四条大宮にある方は、人の少ない時に、お参りに行っている。在宅時のケアマネジャーと継続して会えるようにしている方など、コロナ禍でも個別に出来る支援を工夫して実践されている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	人間関係が構築されており、好き嫌いがあるものの、助け合い、仲良くしている様子もある為、その機会を大切にしている。一緒に協力し合える様な余暇や家事を提供すると笑顔が増えるためその活用することが多い。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご希望に応じて相談や支援できるようにと思っている。終了後も何かあれば連絡し、関係が継続できればと思うため方法を模索している。			

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	望むことの把握に努め、出来る限り希望を叶えるよう支援している。朝食時に牛乳が欲しい、等々さいな所で一人一人違う支援を実施。ゆっくりとお話する時間を大切にし情報を共有している。	入居時の家族の情報やはじめの間は、毎日30分入居者の思いを聞くこととして、聞き取ったことは利用者ノートに記録して職員で共有し、小さいことでもプランにのせて希望を叶えるようにしている。例えば、「朝ご飯のヨーグルトはデザートを刻んで入れてほしい」や、仏壇にお供えするご飯は固くなるので、「個包装のまんじゅうを供えたい。」などや、「櫛を買いに行きたい」との希望に沿って、希望を聞き、職員が買ってくると喜ばれている。入浴の回数や時間の希望にも沿えるようにし、「1番風呂の良い方」、「5時以降の入浴希望」、「毎日入りたい方」など、聞き取った思いを実現している。また、お互いに関係が出来てくると、困った時など利用者に相談すると協力してもらえることが多く、利用者にも助けられている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報収集シート、課題分析表、サービス計画書を用いて各利用者の理解をする機会を設けている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	それぞれの生活のペースを重視し、起床時間やゆっくりしたい時間、何かをしたい時間、就寝時間等職員のペースにならないように心掛けている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケース記録を月ごとでまとめ、毎月モニタリングし、ケース会議、職員会議で周知、支援方法の検討。また、家族とのやりとりも全職員が確認し、意見やアイデアについても記入するようにしている。	入居時に家族に記入してもらった情報を「アセスメントシート」と「情報収集シート」に移し、アセスメントとしている。ケース記録は毎日のモニタリングと介護計画に沿った記録を書くようになっている。担当職員が毎月「ADL及びモニタリング経過記録」を纏めて、ケース会議で支援方法の検討をおこない共有している。計画作成者は「施設介護支援経過」を毎月記録して、1年毎に「情報収集シート」を纏めて「課題整理総括表」を作成し、サービス担当者会議を、【入居者・家族、訪問診療時の医療情報、訪問マッサージ、ボランティア(アロママッサージをして頂いている方)】参加のもとにおこない、1年ごとに介護計画の見直しをしている。しかし、毎月のモニタリングで、変化のある時や退院時には介護計画を見直している。		

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	些細な変化もケース記録に残すように努めているがIT化についていけない面もある。気になる事や相談については利用者ノートに書いたり口頭で申し送り記述できるものを行う等し把握に努めている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今実施していることが全てでなく、ニーズによって変容するものであるという認識を全職員がもてるよう指導しているためそれぞれが柔軟に支援できていることが多いと思われる。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居前から活用している社会資源を入居後も継続できるように調整している。馴染みの関係を継続することが豊かさになるということも支援の中で学ぶことができおり大切にしていきたい。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご希望を確認し、かかりつけ医や病院、緊急搬送先を決めていただいている。内科、歯科、皮膚科の医師が定期的にホームに往診にきてくださっており、希望の往診医があれば受けられるように支援している。	入居時に協力医が月2回の訪問診療や24時間対応ができること話を話し、利用者家族の希望を聞いてかかりつけ医や専門医を決めてもらっている。一人の方が今迄のかかりつけ医に通院されているが、他の方は、協力医に代わられている。訪問歯科や訪問皮膚科は希望者が受診されているが、専門医には家族と通院される方も多い。訪問看護師は毎週半日来られ、24時間オンコールの契約をしている。緊急時は看護師と作成した「緊急時や夜間のフローチャート」により協力医と看護師が連携して対応するので、職員の安心材料となっている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師と情報の共有が図りやすいよう勤務を調整、また必要に応じて電話で指示をもらう事ができている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時はご家族や病院との間に入り、連絡や報告、相談等の連携を図っている。また入院中は面会に行き、状態の変化等の確認や、ご家族やご本人の相談に対応できるように努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化や看取り時の対応についての指針を説明している。状態変化時はご本人・ご家族の意向を再度確認し、医師と連携し、意向にそえるよう取り組むほか必要に応じて職員で話し合う機会を設け振り返りを大切にしている。	入居時に「重度化及び看取りに関する指針」をもとに家族・利用者に説明し、同意書ももらっている。状態変化時にも意向確認書で確認、医師の所見をもとに看取り介護体制の説明をおこない同意を得て看取り計画を作成している。職員の看取りの研修は年1回はおこない、看取りサービス計画作成時に職員会議で心構えを話している。また、看取った後の会議でどう思ったのかを話し合っている。昨年は6人の方の看取りを体験している。その内の、家族の居ない利用者は寂しくないよう職員みんなでお葬式に参列する経験をされており、看取りの体験で職員集団の連携が深められた。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアルに基づき、研修を行っている。また混乱せずに対応できるように看護師とフローチャートを作成、全員が解る場所にファイルを設置している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練や防災研修を同一建物内の事業所と合同で実施、BCPを作成している。地域の防災訓練に参加、今後協力体制がとれるような取り組みをしていきたい。	避難訓練は年2回、併設事業所と合同でおこなっているが、今年度は消防署の協力は得ずに、1回は合同で実施できたが、コロナ禍により、2回目の夜間想定は地震・火災訓練をグループホームだけで通報機器、館内放送、消火器の確認をおこない、利用者は、机の下に隠れたり、非常階段まで避難するなどの参加をしている。風水害の避難訓練も年1回おこなっている。備蓄品は水や食料品、日用品や毛布やガスボンベなどをリストアップし、毎年9月1日と3月11日を防災食を食べる日として、入居者と防災の事を話しながら食べている。利用者の安否確認が出来るように、家族の協力を得て作成し、職員の安否確認やBCP(事業継続計画)も作成し、危機管理に対して積極的に取り組まれている。		

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の尊厳を守れるように心がけている。特に大勢の方がいる食堂での言葉掛けや対応については、十分に注意を払うように努めているが時折配慮に欠けることもあり、振り返りの機会を会議で設けている。	個人情報保護・プライバシー保護マニュアルに、プライバシーの説明と大切さを記入し、毎年3月のマニュアル見直し研修で確認している。リビングでのトイレ誘導の声かけや話を聞くなどの時は、利用者への配慮をしながら声かけをしている。入浴時には浴室の扉にのれんをかけて扉を開けても見えないようにしている。また、居室に入る時はノックをして、夜間巡回後も入室前と同じように鍵を閉めるようにしている。職員の気になる言動には、互いに気づいて注意をしあったり、事例として研修のテーマにして、一緒に考えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話や行動、表情等から思いをくみ取り自発的な行動に対し出来る限り希望に添えるよう努めている。意思表示の困難な方にも表情や様子を観察し可能な限りコミュニケーションを図るよう意識するよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ほとんどの職員が一人一人のペースに合わせ柔軟に対応することができている。無理に実施することなくなり、気持ちに寄り添う姿勢を大切にできていると思われる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容や整髪の声掛けをしたり服装が乱れている時は不快感を与えないよう声をかけている。外出時は普段と違うものを着て頂けるように声を掛けたり、一緒に選ぶ時間を大切にしている。		

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理や片付けは出来るだけご利用者も一緒にして頂いている。味付けを教わったり、ドレッシングやソースは好みの物を選んで頂きかけてもらう。雑誌や会話の中で食べたい物を聞いて、献立にも取り入れている。	開設時からの献立を参考に入居者の食べたい物を取り入れて、献立を考えている。パンかご飯を選べるようにして、毎食、パンの希望にも応じている。食材はネットスーパーで購入し、近所の店では魚や生ものを、オンラインで入居者に品物を選んでもらっている。入居者に切る、皮をむき、ゴマすり、大根おろし、炒め、味見、盛り付け、テーブルを拭くなどをしてもらい一緒に作っている。茶わんや箸、湯呑は馴染みの物を持って来られている。コロナ禍で取り寄せの店が増え、行事の時に寿司や中華料理、洋食、仕出し弁当などを頼んでいる。誕生日は本人の好きなものを聞いて提供している。おやつは3種類以上の飲み物を用意して選べるようにし、たこ焼きやホットケーキ、和菓子の手作りキットなどを楽しまれている。咀嚼力に応じてソフト食や刻みなど食事形態を変えている。献立内容は3ヶ月纏めて、法人本部の管理栄養士に栄養ケアに係る技術的助言及び指導を受けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分もココア、紅茶、コーヒー、ジュース各種をそろえ、好きな時に好きなものを飲んでいただいている。お米よりパンを好む方にはパンを毎食提供、はんぺんや豆腐を使って食べやすくする等の工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	全利用者に週2回の義歯洗浄実施している。起床時、就寝前は必ず実施。歯科より毎月指導をいただき、職員会議で全員で確認することで個別ケアができるようになってきている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄パターンに合わせた声掛けや誘導を行っている。	トイレでの排泄を基本として、入居者の排泄パターンや様子を見ながら支援をしている。布パンツと小さなパッドで自立されている方は5人で、その内トイレの場所が分からず誘導をしている方もある。居室にトイレがあるので、自分のペースで安心して使われている。退院時にリハビリパンツが使われていた方が、日々の支援の中で、1ヶ月ぐらい経つとトイレでの自立した排泄が出来るようになり、布パンツに変わられた方もおられる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者ごとに毎朝牛乳やヨーグルト、オリゴ糖等を提供。水分量や運動の機会等を意識しているがどうしても排便が困難な場合は事前に医師の指示を仰ぎ排便コントロール出来るように努めている。		

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の時間帯を15時以降とし、週5回以上入浴する方も3名以上いる。また1番風呂がいい、17:00以降が良いなど希望の時間に入浴できるよう調整している。	原則は週2回で15時以降に入られている。週5回入浴希望の方や一番風呂に入りたい方、17時以降が良いなど、入居者の生活習慣に合わせての希望に添えるようにされている。湯は1回毎に入替え、湯温や湯量も好みに合わせている。一人ひとりの石鹸箱に昔懐かしい固形石鹸を準備し、シャンプーは好みの物があれば持って来てもらっている。ヘアカラーの希望や、毎日バスソルトを入れて足浴する人もいる。乾燥肌の人が多く保湿剤の処方、痒みが出ないようにしている。馴染みの菖蒲や柚子を使った入浴は好評である。入浴を嫌がる人には時間を変えたり、日を変えたりして対応している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間一人でいるのが不安な方は就寝までリビングで過ごして頂いたり、不安な際は飲み物を提供し一緒に過ごし安心して休んでもらうよう支援している。また、枕元にメッセージを残すことで安心される方もいる。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理票を作成し各利用者が何の薬を内服しているかや注意点等がわかるようにしている。薬剤変更があった際の観察や注意についても情報を共有し、薬剤師との情報交換、相談がしやすい。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	可能な限りで得意な家事をして頂いたり、趣味や興味のあること、昔からの習慣をホームでもすることが出来るよう環境作りを行っている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	希望を聞いて外食をしたり行きたい場所に行く等一人一人に合わせた外出支援を大切にしていたがコロナ禍で実施できていない。	緊急事態宣言が解かれたすぐには、人の少ない時間帯に近くの公園や初詣に出かけたり、車窓ドライブでの紅葉狩りも行き楽しめたが、車窓ドライブでの紅葉狩りも行き楽しめたが、コロナウイルス感染症の流行が拡大している状態で見合わせている。しかし、家族との通院はできている。今はリビングで、映像で楽しむ花見や茅の輪ぐりなどで雰囲気味わったり、オンライン体操を定期的に取り入れ、洗濯物干しや庭の野菜の世話などで階段を下りたり、上階の併設事業所のテラスに行くなどで、体力維持や気分転換を図っている。		

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金への不安がある方は、管理が難しくなられてもご家族協力のもと所持。外出時の支払いの手伝いをしたり、残額を確認してご家族への連絡等の支援を行っている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族や知人への電話の発信や着信時の取次、携帯電話の操作説明、動画通話等を行い、気軽に連絡出来るよう支援している。また、月に1回手紙を出している方もいる。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている +B105:C112	季節を感じて頂ける様、毎月利用者と一緒に折り紙などで壁紙をを作成し、廊下に展示。オープンキッチンで食事作りの音やにおいがあり、昔懐かしい歌や心地よい音楽が響いている。	リビングは入居者と一緒に作った七夕飾りや花火などの飾りで季節が感じられるように装い、窓の開閉で換気をおこない、空調機や加湿器、空気清浄機で温度や湿度の調整をしている。廊下や窓際にソファを置き、それぞれの利用者が、寛げるようにしている。オープンキッチンからは、調理の音や匂いで生活感を醸し出し、テレビを見ている人や新聞を読むのが日課になっている人もいる。また、行事のアルバムや料理本、手芸の本などを設置し、好きな時に読まれている。ほとんどの方がリビングに集まり、利用者同士や職員との会話が弾むときも多い。午後からはレクリエーションで歌を歌ったり、ゲームなどを楽しんでいる。清掃は職員と一緒に箒ではいたり、モップかけや手すり拭き、洗面所磨きなどを行っている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビを通じて談話したり、アルバムや本などを準備し環境を整えている。リビングとは別に廊下にも居場所を作り、部屋以外でもゆったりと過ごせるように工夫している。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は個々に馴染みの物や愛着のあるものを持ち込んでいただき、利用者・家族・職員と一緒に相談しながら、その人らしい部屋作りを行っている。期間を設けて安全に過ごせるよう福祉用具を導入することもある。	居室はトイレと洗面台、空調機が設置され、カーテンやベッドは好みの物を使い、介護用ベッドや福祉用具の必要時は事業所で準備をしている。家から馴染みのテレビやテーブル・椅子、整理タンスを持って来て、家族の写真やプリザーブドフラワーなど好みの物を飾っている。仏壇や神仏のお札を持ってこられている方は、櫛や菓子などを供えている。表札は職員と一緒に毎月飾り付けをして、居室に馴染めるようにされている。掃除は週に2回、職員と一緒にして気持ちよく過ごせるようにしている。		

京都府 グループホーム四条大宮

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	危険個所の見直しを必要に応じて行い自分で安全に移動して頂ける様に支援している。		